卒業論文

女性たちがBLコミックを読む理由

—キャラクターのジェンダーイデオロギーと読者のセクシュアリティに着目して—

小熊英二研究会

学籍番号：71842590

氏名：木下秀記

慶應義塾大学　環境情報学部環境情報学科

要旨

本研究は，男性同士の恋愛や性愛をテーマとしたボーイズラブ，BLと呼ばれる作品群が現在多くの女性たちに読まれている理由を探ることを目的とした．先行研究では，女性が現実世界で感じる女性性によるスティグマを脱ぎ捨てて，自由に恋愛や性愛を楽しむ場を女性性を排除したBLが提供しているとされてきた．しかしながら，その根拠とされるBL作品に登場するキャラクターのジェンダーイデオロギーについては議論が分かれていた．

 本研究では，先行研究で議論が分かれていたBL作品の登場キャラクターのジェンダーイデオロギーや性規範を量的調査によって定量的に評価するとともに，読者女性への質的調査を行った．

　調査の結果，BLに登場するキャラクターは男性的イデオロギーの元に成り立つキャラクターであり，「攻め」の方が「受け」よりも男性的であるということもなく，異性愛規範の適用はなされていなかった．また，読者女性に対する質的調査では，読者女性が現実で感じるセクシュアリティの不和がBLコミックの好みの傾向と呼応することが示唆された．

これらの調査から，BLコミックを読む女性たちは，現実でのセクシュアリティの不和や不満により叶えられない自己実現を叶える場として機能していることが結論づけられた．また，この結論から近年BLコミックを読んでいる女性たちは異性愛規範に懐疑的で，より主体的・能動的な恋愛・性愛を望んでいるが，現実的制約の元で叶えられず，その金られない自己実現の昇華をBLに求めていることが推測できた．

目次

1 はじめに

* 1. 研究背景
		1. 「BL」ブーム
		2. BLの客層とクリエイター
		3. BL作品ジャンルの歴史と多様化

1.2 先行研究

1.3 研究目的

1.4 用語の定義

1.4.1 BL・BLコミック

1.4.2 セクシュアリティ

2 調査概要

3 調査実施概要

4 考察

5 結論

引用・参考文献

謝辞

付録：調査協力依頼書

付録：研究への参加・協力の同意書

付録：Aさんインタビュー

付録：Bさんインタビュー

付録：Cさんインタビュー

付録：Dさんインタビュー

付録：Eさんインタビュー

付録：Fさんインタビュー

付録：Gさんインタビュー

1. はじめに
	1. 研究背景
		1. 「BL」ブーム

　近年，「BL」または「ボーイズラブ」と呼ばれる男性同士の恋愛や性愛をテーマとする作品ジャンルが流行している．

 これまでもBLは『ダ・ヴィンチ』や『ユリイカ』，『美術手帖』といった，文藝・芸術経緯雑誌で特集されていた．しかし2010年代半ばよりNHK『あさイチ』（2015）や，『指原（さし）ペディア』（2016）等マスメディアでの特集が度々行われ，BLと呼ばれるジャンルの作品群が一般にも浸透し始めた．そして，テレビ朝日系『おっさんずラブ』（2018）の連続ドラマ放映は「オリコン年間映像ランキング2018」のテレビドラマDVD部門・BD部門において1位を獲得，「テレ朝キャッチアップ」での見逃し配信再生回数で，テレビ朝日史上初となる100万回再生を突破，「2018ユーキャン新語・流行語大賞」にもトップ10入りを果たす等，大ヒットを記録した．『おっさんずラブ』を皮切りにテレビ東京系『きのう何食べた？』（2018）など現在まで10作品以上のBLドラマが連続テレビ放映されており，元来は限られたコミュニティの中でのみ楽しまれていたBLが，現在ではサブカルチャーの1ジャンルとして一般に受け入れられつつある．

* + 1. BLの客層とクリエイター

　BLは着実に広く受け入れられつつあるが，その愛好者の多くは女性である．矢野経済研究所（2017）によれば，「BLオタク」を自認する消費者は日本国内に約74万人存在すると推計され，その約7割が女性である．そして，「BLオタク」の年代の分布は，アンケート結果では，15～19歳：20.0（前回調査22.6）％，20代：36.5（前回調査36.8）％，30代：9.4（前回調査11.3）％，40代：17.6（前回調査14.2％），50代：8.2（前回調査6.6）％，60代：8.2（前回調査8.5）％となっており，10～20代が牽引する市場である．男女比は男性：女性＝30.6（前回調査17.9）％：69.4（前回調査82.1）％と，男性も急増しているものの，依然として女性中心の市場である．

* + 1. BL作品ジャンルの歴史と多様化

　現在のBL作品群はその源流から現在に至るまでの変遷において，その作品をBL作品たらしめるルールが形成されながら，市場規模の拡大とともにテーマと内容が多様化してきた．
　BL作品群が現在の姿になるまでの変遷を大きく3つに分けると「耽美」，「やおい」，「BL」になる．「耽美」と称される作品群はコミック雑誌comicJUN(1978)やその後に創刊されるコミック雑誌JUNE(1979)，風と木の詩(1976)に代表される美少年同士の恋愛や性愛的関係に主眼を置いた作品群である．その作り手は竹宮惠子など花の24年組と呼ばれる作家群等，少女漫画ジャンルで活躍していた作家だった．そのため，キャラクターたちの見た目は当時の少女漫画に登場する女性キャラクターの絵柄の特徴である「大きな目」，「瞳にハイライトが多い」，「華奢なあご，体つき」を満たす乙女を象徴するような描かれ方であった．絵柄のほか，三浦しをん(2006)によれば,登場人物がゲイである自分をなかなか受け入れられないなど，悩みや迷いを大きく取り上げるのが耽美の特徴である．内容としては必ずしも性愛描写を含むわけではなく，純粋なロマンスを描く作品が多く見られるのも特徴である．

　続いて登場するのが「やおい」と呼ばれる作品群である．やおいという言葉はもともと坂田・波津(2016)によれば，1970年代に漫画家を目指す同人誌参加者に対して漫画編集者が「ヤマもオチも意味も無い」と批評していたことから，低品質な同人誌のことをヤマ，オチ，イミの頭文字をとって「やおい」と呼ぶようになって成立した．この時点では男性同士の恋愛や性愛を取り扱う作品群を称する意味合いはなかった．その後，1986年の夏のコミックマーケットの売り上げの半分を「キャプテン翼」のやおい同人誌が占める等，1980年代後半に少年漫画などに登場する男性キャラクター同士がもしも同性愛の関係にあったらというifの世界線を描いた同人誌が流行し，「やおい」が男性同士の性愛を描く同人誌の代名詞として定着した．（伊藤,2007）この背景には，当時の同人誌にはR指定，R18などのレーティングがなく，誰でも購入することができたため，作家の自主規制と警告の意味合いを込めて表紙に「やおいあり」，「や」といった表記をする同人作家が多かったことが挙げられる．また，この頃に「攻め」と「受け」の概念が定着し，カップリングという言葉が生まれた(西村,2001).

　「やおい」に続いて「BL」，「ボーイズラブ」というジャンルが1990年代に形成されてきた．1991年に創刊された「イマージュ」のキャッチコピーに「BOY’S LOVE COMIC」と冠したのが「ボーイズラブ」という言葉が確認できる初出である（ぶどうりり,2016）.この頃には，「MAGAZINE BE×BOY」（1993）をはじめとして多くのBLコミック・小説レーベルが誕生した．その後現在に至るまで徐々に市場は拡大しぜアニメ，ドラマ等のメディアミックスが見られるなど，前述の通りBLは一般化してきた．また，BLの市場規模が拡大し，作品数が増えていくにつれて作品内容も多様化し，2024年1月1日時点で電子書籍サイト「コミックシーモア」上ではBLコミックのサブジャンルとして「年下攻め」などキャラクター属性によるもの，「時代もの」・「ファンタジー」等の世界観設定によるものなど複数次元で80以上のジャンルに分けられている．

* 1. 先行研究

　ボーイズラブは男性同士の設定にすることで女性キャラクターであれば感じてしまいがちな，性的表現へ触れることへのスティグマを気にせずに済む稀有なメディアとして発達してきた．McLelland(2000)は，「ボーイズラブのマンガは実際のジェンダーの情況について多くを説いてはないが，むしろジェンダーとセクシュアリティーの理想的な姿とは何か，そしてそれが成立するまでのイデオロギーの柔軟なる変動性を露呈しているようである．」と言及している．同人文化であったボーイズラブが商業ジャンルとして成立するとともにジャンル内では共通した特徴が見受けられるようになった．例えば，主人公は概ね二つの役割の類型を通じて簡単に分類することができる．この二つの役割は「受ける」という動詞」から借用した「受け」と「攻める」という動詞から派生した「攻め」である．言葉の定義に従って，受けという登場人物が性的に服従的で，攻めという登場人物は性的に優勢である．上記の説明のようにボーイズラブは家父長制からの脱却を試みているものの，登場人物が「受け」と「攻め」という役割に分けられており性差が存在する．重要な点はこの役割が平等に創られるわけではないということある．「受け」の方が主人公に設定されることが多く，見た目も既成概念に合致して女性らしい．一方，「攻め」は大抵背が高かったり，または社会的地位が高かったりと，女性の読者に好感を抱かせるための理想の容姿，社会階級持つ．それに，この役割は固定的であり，物語の流れの中で不変的である(山本 2005, 19)．なぜこうなったかという理由は多く挙げられているが，肉体関係が異性愛関係でのものを基盤として話が作られたというのが最も頻繁にあげられている．(堀 2009，溝口 2000，永久保 2005)．つまり，読者女性はB Lを通して男性同士の同性愛よりも自身が当事者たる異性愛を読んでいるといった見解である．先行研究の指摘で，ボーイズラブの中の登場人物が「生物学的に男性だが，特徴や態度によって，実は男性ではないことが明らか」になっている(Nagaike 2012)．性別的に不明であるからこそ，ボーイズラブは創造的共有空間に置かれた中性的な媒体として機能できる(Nagaike 2012，McLelland 2000，Suzuki 1999)．これらの点からボーイズラブ作品の男性の主人公が異性愛者女性読者の投影として機能していることは支持できる．一方で，Redmond(2015)によれば，日本語の女性語と男性語による分類によって2014年刊行のボーイズラブアンソロジーコミックの登場人物のイデオロギーを調査したところ，ボーイズラブの登場人物はしっかりと「男性的」なイデオロギーのもとに置かれることが分かっており，「ボーイズラブの登場人物の行動は中性的だ」 という先行研究の結論を否定すると考えられる．
　このように，女性たちがBLを好む理由を説明するにあたって先行研究では，読者女性自身のスティグマ，BLキャラクターのジェンダーイデオロギー，関係性の性差等の観点に触れながら，読者女性自身の性愛・恋愛に対する意識と絡めて語られてきた．しかしながら，この通説を支える根拠に対しては議論が分かれており，BL作品におけるジェンダー的要素と女性がBLを読む理由との関連性についてははっきりとしていない状態である．

* 1. 研究目的

　前述の通り，女性たちがBLを読む理由として，「可視的に明文化される女性性を排除したキャラクターたちの性愛・恋愛に自己を投影することで現実的な制約に囚われることなく楽しめる逃避の場としてBLが機能している」というのが賛否がありながらも通説とされてきた．そして，この通説を支える根拠として，BL作品に登場するキャラクターそれぞれのジェンダーイデオロギー，カップルとなるメインキャラクターたちの性差，カップルとなるメインキャラクターたちの関係性において異性愛規範が適用されているのか否かが議論されてきた．

　しかしながら，昨今BL作品の内容が多様化しレギュレーションが曖昧になっていく中で，BL作品全体を対象としてジェンダー的観点から傾向を論じることは困難だと考えられる．前述の通説を念頭におきながら，今日の女性たちがBLを読む理由を解き明かすには，BL作品と読者女性の両方に目を向ける必要がある．そのためには，昨今人気のあるBL作品の傾向をジェンダー的観点から評価しながら，読者女性のセクシュアリティとBLへの意識を評価することが必要である．

　本研究は，男性同士の恋愛・性愛を描いたBL作品に対して，現在の読者女性たちは何を感じ，何を求めているのか，その結果どのようなBLを好むのかを，作品そのものにおけるジェンダー傾向とそれを好む読者女性個々人のセクシュアリティ観との関連の中で深く探っていくことを目的とした．

　BLを読む女性たちはそのほとんどが異性愛者であり，先行研究を踏まえれば，彼女たちは自らのセクシュアリティ観と現実世界の間にある程度の違和感を感じていることになる．

BLを読む女性たちが特有の違和感を世間に感じているのであれば，これは異性愛者女性というマジョリティの中に組み込まれた未だ明文化されていないマイノリティとして扱うことができる．本研究の目的を達成し，彼女たちの違和感を明文化することで異性愛者女性というマジョリティに埋もれた生きづらさを理解する一例として，本研究の意義があると考えられる．

* 1. 用語の定義
		1. BL・BLコミック

「BL」とは「ボーイズラブ」の略称であり，男性同士の恋愛や性愛の物語をテーマとするフィクション作品のことである．性描写を含みながらも，中心となるカップルの関係性の変化がストーリーの主軸であり，この点において男性同性愛者向けのポルノ作品とは異なる．

「BL」の作品形態は，小説，漫画，テレビアニメ，ゲーム，CDなど多岐にわたる．本研究ではその中でも最も作品数が多く主要な作品形態であるBLコミックを取り扱うこととした．BLコミックは二次創作や同人誌を含まず，BLとしてオリジナルで発行されたコミック作品のことと定義する．

また，BLには「受け」と「攻め」という概念が存在する．この概念は，多くの場合，性行為における役回りによって決められる．挿入される側を「受け」，挿入する側を「攻め」と呼ぶ．

* + 1. セクシュアリティ

　セクシュアリティとは，個人としての主観的な性のあり方と客観的な性のあり方を包摂したものである．身体的性別や社会的性別，性的指向，性自認，性に対する意識や行動の全てを表す言葉である．狭義では性的指向と性自認を指す言葉である．

　本研究においてはセクシュアリティを広い意味で個人の性への向き合い方，あり方，状態という概念として定義して調査を行った．

　加えて，自分自身や他者のセクシュアリティに対する考え方をセクシュアリティ観として定義した．

1. 調査概要
	1. 調査全体概要

　本研究において，女性がBLコミックを読む理由を深く探るために，BLコミックと読者女性それぞれを対象として2つの調査を実施した．

　BLコミックに対しては，ジェンダー傾向を定量的に評価するためRedmond (2016)の調査方法を参考にし，攻めキャラクターと受けキャラクターの言語様相をデータとして収集し，その言語様相のジェンダー様相を数値化した．その上でキャラクターそれぞれのジェンダーイデオロギーとキャラクター感のキャラクター間の言語様相における性差を評価した．

　読者女性に対する調査においては，個々人に深く話を掘り下げて聞くことができるインタビューによる質的調査を行った．これまでのBLコミックとの関わり方や，セクシュアリティ観を詳細に調査する．そして，この回答には一定の形が存在せず，異なる考え方を詳細に調査する必要があったことから質的調査を採用した．また，インタビュー調査においてはある程度質問内容を設定しながら対話によって回答者の考え方を探ることができる反抗増加インタビューを採用した．

* 1. 調査1概要
		1. 調査1方法

　調査1では，現在読者人気が高いBLコミック作品群を対象として作品内でのキャラクターが使用する言語様相について，日本語における男性語と女性語の差異の観察をもとに定量的に評価した．また，カップル間のジェンダー様相の数値差も求め，カップル間の性差も探った．

本調査では，Redmond(2016)が採用した社会言語学調査の方法を参考し，独自の調査方法を構築した．Redmond(2016)ではキャラクター言語におけるジェンダー様相について下記のように記述されている．

日本語における男性語と女性語の差異は社会言語学的な研究を通じてよく観察されている．

(Ide et al. 1986; Mizutani & Mizutani 1987; Okamoto & Shibamoto-Smith 2004)

従来，「男性的」と「女性的」な言語資源は特別な文法的，語用論的な特性を特徴とする． 例えば，文末表現(終助詞)，人称代名詞，言葉遣い，イントネーション，丁寧語の存在有 無等がジェンダーの視点から見ると特徴となる．この言語様相とアイデンティティの関連性は指標性という記号論的な方法から観察されることが多々ある．指標性は言語様相の反復使用から生み出されるが，中村(2006)は指標性が小説，マンガ，テレビ等から生み出されることもあると述べている．このように，メディアに繰り返し露出することで，日本人がキャラクターの特徴とある指標(index)に関係性を見出し始める．

各言語様相は特別な指標性を持つが，人称代名詞と文末表現が特によく研究されている． 先行研究で既に男性的と女性的な様相に分けられているため，簡単に分析がなされる．また，OgawaとShibamoto-Smith (1997)が「この二つの様相が言語とジェンダーに関するステレオタイプの中心となる」と提唱している．

日本語においては人称代名詞と文末表現にジェンダーと形式性による以下のような分配が見られる．（Shibamoto-Smith 2004）

人称代名詞

|  |
| --- |
| 　　　　　　形式的⇄形式的でない |
| 女性 | わたくし　（あたくし）　　　わたし　　　　　（あたい）あたしあなた　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　あんた |
| 男性 | わたくし　（わたし）　　　　 ぼく 　　　　　　　　　おれあなた　　　きみ　　　　　　　　　（あんた）おまえ　きさま（てめえ） |

文末表現

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 非常に女性的 | やや女性的 | 中立的 | やや男性的 | 非常に男性的 |
| わ↑の（＋ね，よ，よね）かしら | の（形容詞・名詞の後）の（動詞の後）でしょう | イ形容詞よ（＋ね）じゃん・じゃない？かなてねてさ | だ（＋ね，よ，よね）おうか？ | ぞぜなあ命令形（＋よ）イ形容詞の発音変化 |

（Redmond,2016）

　また，現在日本人の若者が対極に位置づけられている「非常に男性的」と「非常に女性的」な言語様相が頻繁に利用されておらず，中立的な言語様相を使うのが良いものと見なされている(Okamoto 2012)．分類がイデオロギーに過ぎず，どう呼称されても意味が変化しないため，「男性的」と「女性的」という分類が研究者によって言い換えられ，「下品」と「上品」(または「荒っぽい」と「微妙」となる(Ochs 1993)．とはいえ，分析対象が男性キャラクターのみになるため，男性的表現に関してはより細かい分類が適用されるべきである．そのため，「下品」または「荒っぽい」表現をより男性的であると評価する．また，「上品」，「丁寧」であるからといってより女性的であるという印象は受けないため，こちらは評価を左右しない．

　これらのことから，人称代名詞と文末表現についてジェンダー様相を数値として評価するために下記の点数換算表を作成した．

表1．言語ジェンダー様相の点数換算表

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| ジェンダー様相 | 非常に女性的 | やや女性的 | 中性的 | やや男性的 | 非常に男性的 |
| 点数 | -2 | -1 | 0 | 1 | 2 |
| 人称代名詞 |  |  | わたしわたくしじぶんあなた | ぼくきみ | おれあんたきさまわしてめえ |
| 文末表現 | わのよのねのよねかしら | 〜のでしょうでしょ | イ形容詞動詞よよねじゃんじゃない？かなてねてさ | だだよだねだよね〜おうか？ | ぞぜなあ（命令形）よイ形容詞の発音変化（例：うまい→うめえ） |

　キャラクターごとにダイアログを収集し，この表にある人称代名詞，文末表現が出現するたびに対応する点数を加算していき，この合計値をそのキャラクターについて収集した文数の合計で割ることでジェンダー様相の数値化を試みた．このように，点数の合計をX，収集した文の数をYとするとき，設定した指数Aを下記の式で求めた．

$$A=X/Y$$

　また，本調査については収集するダイアログにおいて対象外とするものがあった．まず，間接・直接に関わらず引用表現については対象としなかった．これは引用が話す人物の役割語として機能しないからである．また，対象キャラクターが実際に発話しているものか不明瞭なものも除外した．そのため，明確に対象キャラクターから出ている対話吹き出しの中に収まっている文字列のみを対象とした．

* + 1. 調査1対象

 本調査は現在読者から人気があるBLコミックにおけるジェンダー様相の傾向を言語様相から探るという目的がある．そのため，同一年に刊行されたBLコミックを対象とする必要があった．また，関係性の分析のために，挿入行為から「受け」と「攻め」が明確に判断できないもの，主人公が三人以上になるものを除いた．そして，現代の社会言語学の分析に関係のない歴史物，ファンタジーものつまり，ストーリーの舞台が現代社会に即したものと捉えられないものについては除外した．

　不特定多数のBL読者による投票によってランキングが決定されるBLアワード2022BESTコミック(ちるちる,2022)のランキング2位から11位の10作品を調査の対象とした．1位の作品「夜明けの唄」（ユノイチカ,2021）についてはファンタジーBLであったため除外した．その結果，対象とした作品は「幼馴染じゃ我慢できない」(百瀬あん,2021)，「神様なんか信じない僕らのエデン（上）」(一ノ瀬ゆま,2021)，「フェイクファクトリップス」(末広マチ,2021)，「世界でいちばん遠い恋」(麻生ミツ晃,2021)，「メロンの味（上）」（絵津鼓,2021）,

「ごちそうΩはチュウと鳴く」（はなさわ浪雄，2021），「寄宿舎の黒猫は夜をしらない」（鯛野ニッケ,2021），「拒まない男」(三月えみ,2021)，「放課後のエチュード」（昼寝シアン,2021），「寺野くんと熊崎くん」(依子,2021)の10作品となった．

* 1. 調査2概要
		1. 調査2方法

　　BLコミックを読む女性に対して，BLコミックとの付き合い方，セクシュアリティ観の詳細についてあらかじめ設定した質問をしながら得られた回答に対して深掘りする質問を臨機応変にしていく半構造化インタビュー調査を行った．2人の読者女性に協力してもらい，それぞれ1人当たり1時間程度のインタビュー調査を行った．

* + 1. 調査2内容

　本調査では，調査協力者に対し，主に次の項目についてインタビューを行うこととした．「調査1の対象となった作品の中で好きな作品があるか」，「BL読者としての自分自身と愛好するBLの作品について」，「調査協力者自身のセクシュアリティ観・恋愛観」また，セクシュアリティ観・恋愛観等，プライベートな話題に踏み込む必要があったため，信頼関係を形成するために筆者自身についても適宜考えや経験を開示した．

* + 1. 調査2協力者

　BL作品の形態は多岐にわたるが，調査1との関連性を示すためにその中でもBLコミックを読む女性を調査対象とした．BLコミックの読者は異性愛者女性がほとんどであるとされているが，性的指向に関しては限定せず調査を行った．また，女性という条件についてはシス女性に限定した．調査協力者の選定には，調査協力者に対して次の協力者の紹介を依頼するスノーボールサンプリングを用いた．

1. 調査実施概要
	1. 調査1実施概要
		1. 調査結果

　対象とした10作品の調査結果として，2.2.1で示した指数Aについて攻めキャラクターの指数AをAa,受けキャラクターの指数AをAbとして表し，カップル間の性差を表すため，AaからAbを引いた値も下記の表に示した．また，各数値を求める際に割り切れないものについては小数点第3位を切り上げた．

表2 調査1結果

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 作品名 | Aa | Ab | Aa-Ab |
| 「幼馴染じゃ我慢できない」 | 0.01 | 0.82 | -0.81 |
| 「神様なんか信じない僕らのエデン（上）」 | 0.02 | 0.31 | -0.29 |
| 「フェイクファクトリップス」 | 1.21 | 1.15 | 0.06 |
| 「世界でいちばん遠い恋」 | 0.02 | 0.45 | -0.43 |
| 「メロンの味（上）」 | 0.01 | 0.02 | -0.03 |
| 「ごちそうΩはチュウと鳴く」 | 0.01 | 0.02 | -0.01 |
| 「寄宿舎の黒猫は夜をしらない」 | 0.01 | 0.01 | 0 |
| 「拒まない男」 | 0.12 | 0.02 | 0.1 |
| 「放課後のエチュード」 | 1.95 | 1.82 | 0.13 |
| 「寺野くんと熊崎くん」 | 0.89 | 2.04 | -1.15 |

　調査では，非常に女性的，やや女性的に分類される表現がほとんど見られず，指標Aがマイナスになるキャラクターは1人もいなかった．このことから，対象作品に登場するキャラクターそのものの言語様相は男性的なジェンダーイデオロギーにあることがわかる．

また，対象とした作品群では受けキャラクターの言語様相の方がより男性的である作品が多く見られた．この背景には，攻めのキャラクターが丁寧語を話し，一人称が「わたし」であることが多かったため中性的だと判断できた作品が多かったことが挙げられる．しかしながら，「わたし」を使用するキャラクターは「きみ」を使用するキャラクターが多く，丁寧語を使うもののやや男性的であった．そして，丁寧語を話す攻めキャラクターは総じて，対応する受けキャラクターに比べて，仕事，年齢など明らかに社会的地位が高く表現されていた．

3.2 調査2実施概要

3.2.1 協力者概要

　以下に示す表は，調査協力者であるBLコミック読者女性の年齢と職業，インタビュー日時を示したものである．以降，調査協力者については表の左端に示したアルファベット記号で表すものとする．

表3 調査2協力者概要

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 年齢 | 職業 | インタビュー日 |
| Aさん | 19 | 大学生 | 2023/12/8 |
| Bさん | 41 | IT系企業勤務 | 2023/12/7 |

3.2.2 質問項目

3.2.2.1 調査1の対象となった作品の中で好きな作品があるか

　調査1との関連性を持たせるため，調査1の対象となった10作品を事前に読んでもらい，好みだと思う作品があれば，インタビュー冒頭に伝えてもらうようにした．なお，調査1の結果については調査協力者に伝えないものとした．

3.2.2.2 BL読者としての自分自身と愛好するBLコミックの作品について

　調査協力者自身が，BL読者としてどのようなスタンスで，現在に至るまでBLコミックを愛好してきたのかを質問した．具体的には，BLコミックを読むようになったきっかけ，どのような作品に触れてきたのか，自分自身のBLコミックの好みにはどのような傾向があると思うか，好みのBLコミックについてどのような要素に惹かれるのかについて質問した．

3.2.2.3 調査協力者自身のセクシュアリティ観・恋愛観

 調査協力者自身のセクシュアリティや，セクシュアリティに関する考え方，恋愛に関する考え方を，経験とともに語ってもらった．また，交友関係や家庭環境等，関連のありそうなライフストーリーがあれば合わせて質問し，掘り下げた．

3.2.3 インタビュー結果・分析

3.2.3.1 Aさん

　Aさんは，現在大学2年生のBL読者女性である．中学3年生の頃からBLコミックを読み続け，BL愛好歴は5年になる．調査1の対象作品の中で好きな作品として，「幼馴染じゃ我慢できない」，「寺野くんと熊崎くん」を挙げた．

　BL読者としての自分自身と愛好するBLコミックの作品について，Aさんは下記のように語った．

中学生の時に「黒子のバスケ」にはまって，その時目にしたBL二次創作にハマり，すぐに商業BLコミックを読むようになった．

　男くさい，オスを感じるキャラクターが好きで，でも，そういうキャラクターに押し倒されたいとかそういうのじゃなくて，逆にそのキャラクターを辱めたいというか，乱れている姿を見たいって思うことが多い．

　それを叶えてくれるのがBLだった，みんなの前で強いというか，強がっているキャラクターを自分の前でだけズブズブにできるというのが心地いい．

　多分，攻めのキャラクターに感情移入しているんだと思う．

Aさんは元々読んでいた少年漫画の二次創作のBL同人誌が入り口となってBLコミックを読むようになった．また，これまでの先行研究では「受け」のキャラクターに読者女性が自己を投影するものと考えられていたが，Aさんは「攻め」キャラクターに自己を投影している」ようだ．「受け」のキャラクターへのこだわりが強い傾向があったため，「攻め」キャラクターについて好みがあるか聞いたところ，

　攻めはなんかこう，そういう時だけ豹変するような，ベッドの上では〜みたいなのが好き．濡れ場以外では弱々しくなくてもいいけどおとなしい感じのキャラクターが好きかもしれない．

　あ，でもこれじゃなきゃだめってわけでもなくて，オスとオスがぶつかり合うみたいなのも好き．でもやっぱ，ベッドの上では一枚上手であって欲しいかな，じゃないと受けを翻弄できないし．

と語った．Aさんは攻めキャラクターについては受けキャラクターほど好みが定まっていないが，性描写におけるこだわりが強い．性描写に重点をおいて作品を選んでいるか質問すると，Aさんは，

やっぱり男らしい受けが乱れに乱れているかが大事だと思ってる．

なんでかはあまりわからないけれど，ベッド以外での行動とベッドでの行動にギャップが大きいことが大事なんだと思う．

　普段はこんな人が，ベッドの上では意外な姿というのが好きだ

と語った．そして改めてBLコミックを読む理由を聞くと，

現実では叶えられない欲望が叶えられるからかな．やっぱり，屈強な男性を押し倒すのは体の小さい自分には無理だと思うし．

と語った．

　続けて，Aさん自身のセクシュアリティ観・恋愛観について質問した．まず，恋愛についてどのような考え方をしているのか聞いた．

自分自身がシャイなのもあって，好きな人ができてもなかなか踏み出せないことが多い．

今まで1人としか付き合ったことがなくて，あんまり好きなタイプとか定まっていないかもしれない．でも男らしい人，なんか汗臭そうな体育会系の人とかを好きになることが多いかも．

Aさんは自身の経験とともに，恋愛に対してはあまり積極的には動けないということを語った．そして，好きになる人の傾向として，BLで好む受けキャラクターと近しい属性を挙げた．また，現実の恋愛への不満について，次のように語っていた．

本当はもっと積極的に恋愛がしたい．けどできないっていうのは，なんかこう，積極的に自分が動いたら恥ずかしいかも，周りの人はどう思うんだろうって怖さがある．

　あと，自分が弱々しいのもやっぱり嫌で，男の人に「女の子1人じゃ危ないから送るよ」って言われても，「じゃあお前といたら安全なのかよ，何から守るんだよ」なんて思っちゃったりもして，なかなか乗り気になれない時もある．

　主導権を握れる恋愛が好きだけど，どこまで踏み込めないっていうのが大きいかなあ．うまくいかないね．

Aさんは現実の恋愛について，主導権を握れないことに不満を抱いていた．また，その原因について，随所で「女の子」，「体が小さい」という発言があり，自身のセクシュアリティ上の欲求と自身の属性の間で葛藤を抱いている様子だった．

　上記の会話の流れから，Aさんが好むBLでのキャラクター同士の関係性を自分自身の恋愛に置き換えたらそれは望ましいものであるか質問すると，Aさんは，

　そうかもしれない．自分は女性だし，なかなか主導権を握れないけど，男性とはできるだけ対等でいたいと思うし，女性だからって言われるのも嫌だな．

　女性だからやっぱり付き合う男性に比べると，背が低かったりとか，物理的に弱い立場であるんだけどどこかでバランスとって対等になりたいなって思うな．

　あとやっぱ，自分から自由に恋愛にのめり込めるのっていいよなあって思うんだよね．

と語った．Aさんは自身の女性性に対して現実では制約を感じていることが窺えた．また，恋愛をより自由に主体的に楽しみたいという欲求を現実では叶えられないことに不満を抱き，奔放的に恋愛・性愛を楽しめるBLコミックに登場するカップルについて，憧れがあることが窺える．

3.2.3.2 Bさん

　BさんはIT系企業に勤める41歳の女性であり，会社では中間管理職の役割を担っている．20代後半からBLを読み始め，BLコミック愛好歴は10年以上になる．調査1の対象となった作品のうち，「フェイクファクトリップス」と「放課後のエチュード」を好みとして挙げた．BLを読み始めたきっかけと，現在に至るまでのBLの楽しみ方を質問すると，Bさんは

本屋さんで偶然見かけた「純情ロマンチカ」に一目惚れして，そこからBLにハマりました．

そこから，「純情ロマンチカ」が連載されていたBLコミック雑誌を毎号必ず買うようになって，気づいたら電子でBLコミックを買い漁るようになってました．

寝る前にいつも読んでて，自分の心の栄養って感じですかね，キュンキュンしたいです．

と語った．挙げてもらった作品の好きな部分，好きなBLの傾向について聞くと，

スパダリ攻めが好きです．受けのためならなんでもやっちゃうみたいなのが好きですね．溺愛具合が重要です．

好みは結構王道かなって思ってて，特殊な設定とかがあるとうーんって感じではありますね．例えばオメガバースとか最近あるじゃないですか．あれってあんまり好きじゃないというか，ついていけないんですよね．

と語った．BさんはBLコミックでスパダリと呼ばれる受けに対して過保護気味な攻めキャラクターが登場する作品が好きなようである．また，オメガバースという男性同士でも妊娠出産が可能となる両性具有の特殊設定を苦手なものとしてあげていた．

　次に，自身のセクシュアリティ観について質問した．最初の質問として，どんな恋愛を望むか質問したところ，Bさんは

　離婚してからはもう，恋愛しようって気にはならないですね．仕事が忙しくてそんな時間もあまりありませんし，もう自分はいいかなって気持ちでいます．

と返答した．Bさんの受け答えは，BLについて質問した時とは違い，解答の歯切れが悪かった．また，語っているように，自身については離婚を経験しておりもう新たな恋愛は望んでいないようである．離婚で受けたショックが原因にあると予想し，どのような理由で離婚をしたのか尋ねたところ，Bさんは次のように語った．

　元夫との間に子供ができなかったことです．2人とも元々，子どもを持つ希望が強くて，5年ほど不妊治療に勤しんできましたが，あまり上手くいかず，その中ですれ違いが大きくなり，一緒にはいられなくなってしまいました．元夫のことはとても好きでしたし，今も嫌いではないのですが，不妊治療がとても辛かったのと，自分を責める気持ち，罪悪感がどうしてもあって，辛くてお願いして離婚してもらいました．

Bさんは筆者の質問に対して，素直に答えてはくれたものの，淡々と悲しそうな表情で述べていた．これらの様子から，離婚でのエピソードがショックとしてBさんに残っており，本人は「時間がないから」と言っているものの，離婚でのショックが尾を引いている印象を受けた．また，Bさん本人は自分自身の恋愛はもういいと語っているものの，BLの好みを聞いた際に「キュンキュンしたいです」と言っていた．このことについて，「BLでキュンキュンすることで満足できるのか」と質問すると，

　そうですね，自分ができない分，物語を読んでキュンキュンしたいってのがあると思います．少女漫画だと主人公が若すぎて共感できないし，ゴールに結婚があるのかなって思うと嫌な感じがします．そして，現実だとやっぱり，同じことを繰り返すのではないかと思ってしまって恋愛を遠ざけてしまいますね．現実では欲求が満たされないのは事実です．

と語った．

　Bさんは自身が抱えるトラウマから，自分自身が恋愛をすることは難しいと感じており，恋愛や性愛への欲求をBLコミックを読むことで発散していると語っていた．また，BLの好みの傾向を聞いている中で，スパダリ攻め，華奢で中性的な受けという単語が出てきたことから，異性愛規範的関係にあるカップルが登場するBLコミック作品を好むようである．

1. 考察

本節では，BLコミック読者女性たちが抱える個々の事情と，BLコミックの好みへの傾向の関連を考察した上で，BLコミックが読者女性にとって自身の理想の恋愛や性愛を叶える場であると論じたい．

調査2において，Aさん，Bさんともに現実の世界では恋愛や性愛の欲求を満たせていないという部分が共通していた．そして，それぞれ，現実では叶えられないとする欲求がBLコミックの好みに現れていたように窺える．
　Aさんの場合は，自身の女性性へのコンプレックスを抱えており，男性と対等でありたいという希望が強く，恋愛に対してもっと能動的になりたいが，現実世界では制約が多いと語っていた．BLコミックの好みでは男性性の強いキャラクターが受けキャラクターであることを好んでいた．これらのことから，現実で自身の欲求を満足に満たすことができない葛藤をBLコミックにぶつけていることが考えられる．また，攻めキャラクターへの投影が見られた

また，Bさんに関しては不妊治療でのトラウマがあり生殖への嫌悪と罪悪感が窺え，これがオメガバースという男性同士でも妊娠出産ができるという設定を好まないという発言に現れていたように考えられる．また，登場カップルが異性愛規範的関係にある関係を好んでいたことから，異性愛者である自己を投影していることが考えられ，その上で妊娠出産が可能な設定は自身の投影を阻害するために好まないのだと考えられえる．

上記のように，調査2からは，BLコミックの好みの傾向が読者女性自身が抱えるセクシュアリティへの不和，葛藤に呼応するように形成され，BLが現実では叶えられない自己実現の場となっていることが窺えた．

また，調査1において対象となった人気10作品の中では「受け」キャラクターが「攻め」キャラクターより男性的であることが好まれる傾向にあることがわかった．

読者女性がより男性的でない方のキャラクターに自己を投影しているのか，先行研究にあるとおりに「受け」キャラクターに自己を投影しているのかは定かではない，しかしながら，より男性的ではないキャラクターに自己を投影しているのであれば，「攻め」キャラクターに自己を投影していることになり，ここから，昨今のBLコミック読者女性の多くが，恋愛や性愛に対して「攻めキャラクター」のようにより能動的でありたいと感じているように推測できる．また，より男性的な「受け」キャラクターに自己を投影しているのであれば，恋愛や性愛に対してより男性的な自由で積極的なあり方を望んでいるように推測できた．BL読者女性の投影先がどのキャラクターであるにしろ，読者女性の多くが現実における異性愛規範への抵抗感を抱えていることが窺えた．

5.結論

　本研究では，人気BLコミックにおけるキャラクターのジェンダーイデオロギーとBLコミックを読む女性たちのセクシュアリティ観に焦点をあてて，女性がBLコミックを読む理由，BL愛好を続ける意識に迫った．その結果，彼女たちがBLコミックに求めているのは，現実ではなされない自己実現の達成であると，セクシュアリティとBLコミックの好みの傾向の呼応から結論づけることができた．また，定量的調査で，近年人気のあるBLコミックの傾向として，より男性的なキャラクターを攻める設定であることがわかった．攻めが男性的，受けが女性的という異性愛規範を適用した設定が人気作品にあまり見られなくなっている．このことから，BLコミック読者女性の達成したい（できていない）自己実現の表れとして，異性愛規範への抵抗が読み取れる．

　先行研究では女性がBLを読む理由として，中性的な「受け」キャラクターに自己を投影をすることで，女性性のスティグマから逃れた自由な恋愛・性愛を楽しめる逃避先としてBLが成立していることが支持されてきた．しかしながら，本研究において，自己の投影先は「受け」というキャラクターに限らないことが示唆された．一方で，BLコミックが，現実では叶えられない欲求，セクシュアリティの違和感をなくすものとして機能してことも示唆されたため，自由な恋愛・性愛を楽しむ逃避先としてのBLという部分については先行研究を支持できるものとなった．

　BLコミックの内容が多様化しますます市場規模の拡大が見込まれている昨今においては，その内容の多様性がより多くの人に現実におけるセクシュアリティの不和からの逃避先を提供するものとなると考えられる．これからも，BLがより多くの女性のセクシュアリティ不和による精神的摩擦を緩和するものであることに期待する．

引用・参考文献

大日本印刷（2020）BL（ボーイズラブ）に関する意識調査

Redmond.R.(2015).Linguistic Identity in Japanese Boy’s Love Manga.

藤本由香里.(2020).BLの教科書. 少年愛・J U N E /やおい・BL それぞれの呼称の成立と展開.2-17

堀あきこ. (2009). 欲望のコード―マンガにみるセクシュアリティの男女差. 京都:臨川書店.

Ide, S. et al. (1986). Sex Difference and Politeness in Japanese. International Journal of Sociology of Language, Vol. 58, No. 2, 25-36.

金水敏. (2003). ヴァーチャル日本語役割語の謎. 東京:岩波書店. ――――. (2014).〈役割語〉小辞典. 東京:研究社.

小林美恵子. (1999) . 自称・対称は中性化するか.『女性のことば・職場編』,現代日本語研究会(編) . 113-137.

マリィ，クレア. (2013).「おネエことば」論. 青土社.

Mclelland, M. (2000). The love between ‘Beautiful Boys’ in Japanese women’s

comics. Journal of Gender Studies, Vol.9, No.1.

Miyazaki, A. (2004). "Japanese Junior High School Girls' and Boys' First-Person

Pronoun Use and Their Social World." Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People. Ed. Shigeko Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith. New York: Oxford. 256-274.

Mizutani, O.,& Mizutani, N. (1987). How to be polite in Japanese. Japan Times.

溝口彰子. (2000). ホモフォビックなホモ，愛ゆえのレイプ，そしてクィアなレズビアン:最近のやおいテキストを分析する.クィアジャパン 2:変態するサラリーマン.193-211.

Nagaike, K. (2012). Fantasies of cross-dressing: Japanese women write male-male erotica. Brill.

永久保陽子. (2005).『やおい小説論』専修大学出版局.

中村桃子. (2006). 言語イデオロギーとしての「女ことば」:明治期「女学生ことば」

の成立. 日本語ジェンダー学会(編)佐々木瑞枝(監修,日本語とジェンダー.

121-138.

Ochs, E. (1993). Indexing gender. Sex and Gender Hierarchies. Cambridge University Press.

Okamoto, S. (1995). “Tasteless” Japanese: less feminine speech among young Japanese women. Gender articulated: language and the socially constructed self. Eds. Kira Hall and Mary Bucholts. New York: Routledge. 297–325.

Anthony Giddens. 親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシ

ズム. 松尾精文, 松川昭子訳. 而立書房, 1995, 302p.

相田美穂. 期待される腐女子像からのエクソダス―「可能性」の読み込み／誤読に関する一

考察―. 広島修大論集. 2013, vol. 54, no. 1, p. 207-220.

東園子. 女性のホモソーシャルな欲望の行方：二次創作「やおい」についての一考察. 分化

の社会学：記憶・メディア・身体. 大野道邦, 小川伸彦編. 文理閣, 2009, 286p.

石田仁. 「ほっといてください」という表明をめぐって：やおい／BL の自律性と表象の横

奪（特集BL スタディーズ）. ユリイカ. 2007, vol. 39, p. 114-123.

ケタ. ネット上にたゆたう＜腐女子＞：批評の場と言葉（特集 BL ボーイズラブ オン・ザ・

ラン！）. ユリイカ. 2012, vol. 44, p. 196-199.

中井啓人, 大藪毅. 日本型 LGBT ムーブメントの提案：日本における欧米型 LGBT ムーブ

メントの成果と課題から見えること. 慶應義塾大学, 2016, 修士論文.

堀あきこ. リアルとファンタジー、その狭間で見る夢（特集BL ボーイズラブ オン・ザ・ラ

ン！）. ユリイカ. 2012, vol. 44, p. 178-183.

溝口彰子. BL 進化論. 太田出版, 2015, 356p.

森山至貴. LGBT を読みとく：クィア・スタディーズ入門. ちくま新書. 2017, 237p.

Ide, S. et al. (1986). Sex Difference and Politeness in Japanese. International Journal of Sociology of Language, Vol. 58, No. 2, 25-36.

金水 敏. (2003). ヴァーチャル日本語 役割語の謎. 東京:岩波書店. ――――. (2014).〈役割語〉小辞典. 東京:研究社

小林 美恵子. (1999) . 自称・対称は中性化するか.『女性のことば・職場編』, 現代日 本語研究会(編) . 113-137.

マリィ、クレア. (2013).「おネエことば」論. 青土社.

Mclelland, M. (2000). The love between ‘Beautiful Boys’ in Japanese women’s

comics. Journal of Gender Studies, Vol.9, No.1.

Miyazaki, A. (2004). "Japanese Junior High School Girls' and Boys' First-Person

Pronoun Use and Their Social World." Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People. Ed. Shigeko Okamoto and Janet S. Shibamoto Smith. New York: Oxford. 256-274.

Mizutani, O., & Mizutani, N. (1987). How to be polite in Japanese. Japan Times.

溝口 彰子. (2000). ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビア ン:最近のやおいテキストを分析する.クィアジャパン 2:変態するサラリーマ ン.193-211.

Nagaike, K. (2012). Fantasies of cross-dressing: Japanese women write male-male erotica. Brill.

永久保 陽子. (2005).『やおい小説論』専修大学出版局.

中村 桃子. (2006). 言語イデオロギーとしての「女ことば」: 明治期「女学生ことば」

の成立. 日本語ジェンダー学会(編)佐々木瑞枝(監修, 日本語とジェンダー.

121-138.

Ochs, E. (1993). Indexing gender. Sex and Gender Hierarchies. Cambridge University Press.

Okamoto, S. (1995). “Tasteless” Japanese: less feminine speech among young Japanese women. Gender articulated: language and the socially constructed self. Eds. Kira Hall and Mary Bucholts. New York: Routledge. 297–325.

――――.，& Shibamoto-Smith, J. (Eds.). (2004). Japanese language, gender,

and ideology: Cultural models and real people. New York: Oxford University Press.

――――.(2012). Indexical meaning, linguistic ideology, and Japanese